

維新経済史再考

——多摩「シルクロード」の人々——

石井寛治

ここに掲載するのは、2007年11月10日（土）に、東京経済大学の同窓会である葵友会の多摩三支部合同講演会において行った講演の原稿に若干加筆したものである。私が1998年に東京経済大学に招聘されたときは、色川大吉氏らによる多摩学研究会は事実上閉鎖されており、そこでの研究を継承することはできなかった。しかし、本学の位置する多摩の歴史には、私なりに関心を抱いていたため、葵友会からの多摩に関する講演の依頼があったさいに、思い切ってお引き受けした。そして、幕末の政局を疾風のごとく駆け抜けた新選組の発祥の地であるとともに、土佐と並ぶ自由民権運動の中心地域であり、さらに外資によって日本最大規模の器械製糸場を生んだ多摩地域に、経済史的考察を加えることによって、何らかの問題提起ができないかと思い、演題を「維新経済史再考」としたのである。三井教授は、同じ大学の卒業生という気安さもあってか、新米教員の私の質問に快く答えて下さり、頼りになる先輩としてご指導賜ったことを感謝したい。多摩にある東京経済大学において三井教授の同僚として過ごした時代の記念として、多摩に関する講演記録をここに掲載させて頂いた。講演の機会を与えられた葵友会の方々に、心からお礼申し上げる。なお、講演会の雰囲気伝えるため、口語文のままとしたこと、そのこともあって規定枚数をかかなり超過したことをお許し願いたい。

1. 多摩地域は攘夷思想の温床と言えるのか

ただいまご紹介いただきました石井です。本日は、葵友会支部の講演会にお招きくださり、お話する機会をお与え下さいまして有難うございます。私は、今から10年程前に東京経済大学に参りましたため、そのころまで多摩学という新しい研究分野を開拓されてこられた色川大吉先生とは丁度すれ違いになっており、東京経済大学における多摩学研究会のお仕事を継承することは出来ませんでした。実は今回、多摩の人々の商業活動の歴史について話してほしいと言われましたときに、はたと困りました。大学では日本の流通史を担当しているのですが、多摩の流通史については何も知らなかったからです。

ただ、幕末の多摩地域からは新選組が生まれて京都を中心に華々しい活動をし、明治の自

由民権運動では土佐とともに多摩が大きな拠点となったことについては興味があり、その背景にどのような経済発展が見られたのかという問題には関心がありました。とくに、私は、大学院のころから近代日本の生糸産業の歴史を研究してきたものですから、生糸の生産と流通において多摩地域が重要な位置を占めていたことには関心がありました。幕末開港とともに横浜から大量の生糸がフランス・アメリカへと輸出され、多摩地域は生糸の産地として、また各地から横浜に送られる輸出生糸の通り道として、大きな役割を果たすようになったからです。

外国貿易の開始による経済社会の変動は、日本国内に攘夷運動を巻き起こし、外国への対抗を天皇を中心に行おうとする尊王攘夷運動が広がります。幕府の募集に応じて、多摩地域から集った浪士組、のちの新選組の人々も、最初は、そうした尊王攘夷運動のために働くのだという意気に燃えていました。幕府が浪士を集めるときに使った「尽忠報国」の志が厚いものという言葉は、「尊王攘夷」の志と同じ言葉として理解され、近藤勇も土方歳三も新選組のスローガンとして「尽忠報国」という言葉を愛用したそうです¹⁾。しかし、文久3年8月18日に孝明天皇の意を受けて薩摩藩と会津藩が組んで起こしたクーデターによって、それまでもっとも過激で熱心な尊王攘夷派であった長州藩が肝心の天皇によって退けられてしまい、幕府も本気で攘夷を実行する気がなくなると、近藤たちの攘夷精神にも変化が見られるようになります。思想史家の松浦玲さんは、攘夷のために働こうとしていた時期の新選組は思想集団としての性格をもっていたが、慶應年間になると、そうした思想集団としての性格を失い幕府のために働く鉄の規律をもつ武装集団になったという意味のことを述べています。多分そう言って良いでしょう。ただ、松浦玲さんは、近藤らの出身地の多摩には「攘夷」論を受け入れる基盤があって、近藤も熱烈な「攘夷」論者になったと断定していますが、その根拠ははっきりしません。指摘されているのは、多摩の少し北で同じ武蔵国の農民出身の渋沢栄一も一時熱烈な攘夷思想の持ち主であって、仲間と一緒に横浜に出かけて居留地に放火し、飛び出してくる外国人を片っ端から切り殺そうという過激な攘夷計画を立てたが、途中で無理だと気づいて中止したということだけです。したがって、近藤や土方が攘夷思想を放棄したという理由についても、攘夷は無理だということに気づいたというだけの説明になっており、もともとの彼らの攘夷思想がどの程度、生活経験に根ざしたものであったかという検討はなされていないのです。

そうだとしますと、多摩には、松浦さんの言うように、人々が攘夷思想を受け入れる基盤が本当にあったのか、多摩地域は攘夷思想の温床と言えるのか、という疑問が出てきます。何故ならば、多摩の人々の中には、開港直後から横浜に実際に出かけて外国商人と接触し、商取引をする人々が沢山居たからです。渋沢の場合は、農業の傍ら藍玉の取引で利益を上げて攘夷のための武器を買い込んだのですが、藍玉は国内用の染料であって輸出品ではなく、渋沢が横浜に出かけた形跡はありません。その意味で、渋沢たちの念頭にある「横浜」とか

「外国人」というのは、孝明天皇や攘夷派の武士達が外国人を「禽獣」つまり「けだもの」と呼んだのと同様に全く観念的なものだったようです。実際に開港場の横浜へ出かけてみて、外国商人と会って商取引をしてみると、なんだ自分と同じ人間ではないかということが分かるのですが、武士や内陸の人々の多くはそうした経験がなかったのです。島崎藤村の有名な小説『夜明け前』には、開港の年に、中津川の商人萬屋安兵衛が生糸を馬の背に積んで、横浜まで出かけたときのことが記されています。主人公の青山半蔵の師匠である医者宮川寛齋もそれに同行しました。萬屋と寛齋は英国人の「ケウスキイ」(=ケズウィック、英壺番館のジャーディン・マセソン商会パートナー)に会って生糸売り込みの商談を試みたところ、藤村の文章によると「寛齋が近く行って見たその西洋人は、髪の毛色こそ違ひ、眸の色こそ違っているが、黒船の連想と共に起って来るやうな恐ろしいものでもない。幽霊でもなく、化物でもない。やはり血の気の通っている同じ人間の仲間だ²⁾」ということでした。市場での商取引が成り立つためにはお互いが同じ人間だということが了解されなければならないし、商取引を通じてそうした対等な人間としての認識が強まって行くのです。もちろん、そこには対立と緊張があり、対抗意識が働きますが、それは相手を抹殺する排外的な「攘夷」意識とは違うと言えましょう。

では、多摩の場合はどうだったのか。そこで、多摩の歴史について詳しい方々の新選組についての最近の議論を探して見ますと、2005年に佐藤文明という方が『未完の多摩共和国－新選組と民権の郷－』という書物を出されています。著者は「本書は読み物であって、一定の史観に基いて書かれた学術的な歴史書ではない³⁾」と記しておられますが、実に良く調べて書かれていて感心しました。同書によると、多摩の商人たちは、開港された横浜への関心を一挙に高めており、幕府が欧米諸国と結んだ通商条約の写しが、多摩の各地の家々から発見されたそうです。多摩は、「クールに、かつ対等に外国人を受け入れようとしていた」と佐藤さんは記しており、「多摩人の多くは、開明派代官・江川〔伊豆の韭山に今でも江川太郎左衛門屋敷があります－石井〕の影響もあって、攘夷急進思想を抱いてはいなかったし、そのような暴走を危険だ、と感じていた」というのです。そのひとりで同書の主人公ともいえる日野宿の間屋兼名主の佐藤彦五郎が、近藤勇らとも深い繋がりがあり、とくに近藤の急進的な攘夷思想の転換に影響を与えた可能性があるとして述べています。これは推論に止まるとはいえ、なかなか興味深い見方だと思います。最近ようやく新選組が本格的な学問研究の対象となり、近藤が多摩の佐藤たちに送った手紙が分析されて、近藤の政治思想が多摩の地域のリーダーに与えた影響が論ぜられるようになりましたが⁴⁾、逆に近藤たちの政治思想が多摩地域の人々の思想とかエートスによってどのように規定されていたかは論じられていないからです。近藤や土方らがもともと多摩の農民であり、商人であったということが、かれらの攘夷思想が転換していく上で何らかの影響を与えていたとも言えるのではないのでしょうか。武士の攘夷思想が観念的なものであるためにテロ行為に傾き易く、しかも簡単には変化しな

いのに対して、農民や商人の攘夷思想は、外国人と直接・間接に接触する経験を通じて変容しうるものであり、健全な対抗心としてのナショナリズムの性格を帯び易いと言えましょう。この点は、最近発見されたという佐藤彦五郎の日記などの新史料の分析によってさらに立ち入って解明される必要があります。今回は多摩の自由民権運動については触れる余裕がありませんが、農民たちが集会を開いて欧米の近代思想を学習し、独自の憲法草案を生み出す迄になった歴史的前提には、攘夷精神の高揚でなく、むしろ開明的精神の広がりがあったと見た方が良いのではないかと思います。

2. 多摩の「シルクロード」とは何だったのか

では、多摩と横浜を結ぶ「シルクロード」とはどのようなものだったのでしょうか。生糸の集散地八王子から横浜に通ずる道は幾つもありましたが、厚木へ向かう道から片倉で分かれて鎌水峠を越える道がもっとも短距離だったために、生糸商人が良く利用したとされています。1957年にこの道こそが日本の輸出生糸を運んだ「絹の道」だということで、有志の方々の手によって高さ2メートルもの石碑が建てられました。1996年には文化庁の「歴史の道百選」のひとつにも選ばれ、今では「絹の道資料館」も建てられ、観光名所となっています。私も一度見たいものだと思いつつ、見る機会がなかったので、ここでお話する機会に見学しようと思って、訪ねてみました。

JR中央線の八王子駅南口から京王バスに乗ろうとしましたら、土曜日だったので本数が少なく、仕方なくタクシーに乗って絹の道の入口へと頼みましたら、ハイハイと国道16号線を飛ばして、絹の道の南口に近い所まで行ってしまいました。私は、そこから横浜へ向かって生糸を運ぶのと逆方向に道を辿ることになったのですが、予想した以上に狭い山道で、ここを生糸を馬に乗せて運ぶのは容易でない印象をもちました。北口まで行ってから逆戻りして南口へ戻り、近くの絹の道資料館を見学し、そのまま南の柚木街道でバスに乗って、JR横浜線の橋本駅へ出て帰宅しました。

この「絹の道」は、各地の生糸商人が横浜に向かって通ったという単なる交通路ではなく、ここ鎌水地方にも有力な生糸商人が輩出して、あちこちの生糸産地から集荷した生糸を横浜へ運んだそうです。鎌水村には開港前から多くの生糸商人が居て、八王子織物業に必要な原料生糸を集める活動をしていました。幕末の天保14年(1843)の幕府の調査によりますと、八王子周辺の農村34箇村に47人の生糸商人がいて、そのうち18人が鎌水村に集中していたとのことでした。

名主の大塚五郎吉は、その中でもっとも有力な生糸商人でした⁵⁾。大塚家には生糸取引関係の帳簿などの古文書が大量に残されており、八王子市史の編纂過程で、一橋大学の佐々木潤之介氏らが分析をされました⁶⁾。それによりますと、五郎吉は、ただ生糸を買い集めて販

表 1 八王子での鑪水商人の生糸購入 (明治 4.10 - 5.9) (両、分、朱)

①大塚惣兵衛	58,368. 2. 0	⑥八木下仲右衛門	759. 2. 2
②大塚五郎吉	21,519. 0. 0	⑦大塚利兵衛	233. 1. 2
③大塚紋十郎	15,064. 2. 0	⑧加藤兵吉	100. 1. 0
④八木下清之助	1,300. 0. 0	⑨八木下勝五郎	60. 2. 0
⑤大塚七兵衛	1,055. 0. 0	計	98,460. 3. 0

売するだけでは利益がだんだんと少なくなったので、生糸の原料の繭を買ってきて農家に渡して生糸を挽かせ、挽き賃を払って生糸を引取るやり方を採用するようになります。横浜が開港されますと、五郎吉は早速翌年には生糸を横浜へ運んで販売しています。八王子の生糸市場では、生糸の売り手から買い手に立場を変えて、横浜に次々と生糸を送ったのです。記録によれば、慶應 3 年 (1867) には、横浜の生糸売込問屋原善三郎商店に 17 回にわたって合計 736 貫 (= 1 個 9 貫として 82 個) の生糸を出荷しました。当時としてはかなりの量だったと言えましょう。この年、70 歳を越えていた五郎吉の生糸商人としての活動は、息子が早く亡くなっていたため、仲間の生糸商人である大塚惣兵衛・宗平親子が後を継ぐ形になります。『八王子市史』下巻 (1967 年) によりますと、明治 4 年 10 月からの 1 年間に八王子の生糸市場での鑪水村の生糸商人による生糸購入額は、表 1 のとおりで、かなりの額に達しています。

トップの大塚惣兵衛が 5 万 8368 両で、第 2 位の大塚五郎吉の 2 万 1519 両を大きく抜いています。仮に 1 個 = 9 貫匁の仕入値を輸出単価の 90% の 510 円とすると、惣兵衛の扱いは 114 個、五郎吉の扱いは 42 個となります。明らかに五郎吉の扱いは幕末よりも減少しており、代わって惣兵衛が鑪水村生糸商人の代表格になったことが分かります。しかし、その惣兵衛・宗平親子の活動も、明治 22 年には宗平の死によって終わってしまいます。どうやら、鑪水商人の活動は明治 10 年 (1877) 前後がピークだったようです。八王子町の生糸商人の活動がピークを迎えるのも明治 10 年前後のことでした。八王子町最大の生糸商人富田造酒之助は、明治 12 年 (1879) ころ生糸を「海外に輸出すること 1 ヶ年千個以上を算せり」と言われたそう⁷⁾、これは先の鑪水商人を 1 桁上回る大変な取扱量でした。富田造酒之助は、明治 24 年 (1891) の『全国商工人名録』には、所得額 1000 円台という八王子町切っでの大規模生糸商として掲載されていますが、この富田も明治 26 年 (1893) には「艱難の極に陥る」⁸⁾と評されており、没落しています。

いま、明治 25 年度 (1892) の横浜入荷統計から、主要生糸産地の荷主を見ると、表 2 のとおりです。

この表に示されている八王子町の生糸荷主 6 名は、①相馬利喜三 277 個、②守屋喜右衛門 199 個、③北村理三郎 178 個、④萩原彦七 109 個、⑤新井伊兵衛 104 個、⑥毛利徳兵衛 100 個であって、富田の名前はがありません。最大の相馬が 277 個ですから、かつての八王子最大

表2 横浜生糸問屋への生糸入荷荷主の規模別構成

	100 個 -	200 個 -	500 個 -	1000 個 -	
上野国	5	7	2	5	交水社 1735, 昇立社 1685, 碓氷社 1613
武蔵国	20	3	2		北甘楽社 1236, 三英社 1116
うち八王子	5	1			
信濃国	24	26	8	2	開明社 2200, 東行社 1250
甲斐国	10	4	1		
岩代国	9	7	7		

出典：広瀬徳七郎『大日本製糸家名誉録』（横浜亀徳堂，1893年）。

の生糸商富田造酒之助が，明治12年に1000個以上の生糸を出荷したというのが，如何に巨大な出荷量だったかが分かります。

この統計によれば，明治25年（1892）当時の全国最大の荷主は，信濃国諏訪郡の器械製糸家片倉兼太郎たちの共同結社開明社であり，信濃では須坂の器械製糸家の結社東行社が続いています。1000個以上の荷主が多いのは上野国で，座繰製糸を営む小規模製糸家の共同出荷結社である交水社，碓氷社，北甘楽社などが並んでいます。座繰生糸を出荷する商人で，ずば抜けた規模を誇っているのが下村善太郎の昇立社です。下村は，明治初年には甲州の若尾逸平と並ぶ地方生糸荷主の両大関と言われた有力商人で，若尾逸平が銀行業に転換し，弟の若尾幾造が横浜生糸売込問屋になった後も，下村は地方生糸の取扱を続けていました。下村の強みは，専属の早飛脚を雇っていて横浜の生糸市況が上向きに転じそうな気配を見せると，その飛脚が他の生糸商人より1日早く情報を前橋の下村にだけ伝えたことにあると言われてます。しかし，そうした下村の優位性は，明治10年（1877）に電信が東京から前橋まで通ずるようになると失われます。そこで下村は，昇立社という賃挽きの会社を作り，原料繭を買ってきて座繰生産者に配り，挽き賃を払って生糸にさせるようになりました。鎌水村の大塚五郎吉が開港前にやっていたのと同じことを大々的に展開したわけで，そうやって生産面を取り込むことによって大規模荷主として活躍し続けたのです。明治10年前後から単純な地方生糸商人の活躍の場がなくなるのは，横浜と生糸産地の間に電信が開通して，価格差がなくなったことと，器械製糸家や座繰製糸家が集って共同結社を作り，商人に頼らずに横浜へ直接出荷するようになったためです。八王子の生糸商の富田造酒之助や鎌水村の大塚惣兵衛らが相次いで没落したのは，そうした電信という情報革命に対して有効な対応策を打ち出せなかったためだろうと思います。

以上，多摩の「シルクロード」を盛んに利用した八王子地域の生糸商人にどのような人々が居たかを見てきました。しかし，「シルクロード」は，たんに八王子地域の生糸商人が利用しただけではありません。生糸産地である甲州・信州・上州からの生糸もまた，八王子まで運ばれたあと，もっとも横浜へ短距離で行けるこの「浜街道」＝「シルクロード」を使った

表 3 生絲出荷量（元治元年 6 月調べ）

奥州・羽州（4500 駄）、上州（2000 駄）、甲州（500 駄）、武州八王子辺（500 駄）
信州（1000 駄）、濃州ほか（1200 駄）、合計（9700 駄）（1 駄 = 4 個 = 36 貫匁）

に違いないとされ、だからこそ、横浜への日本全体の「シルクロード」として評価されてきたのです。確かに、甲州や信州とくに南信州からの輸出生糸の多くは、甲州街道を通過して八王子へ着いたあと、江戸や東京に行かずに、いわば裏道であり近道であるこの「浜街道」を通ったものと思われます。たとえば、下村と並び称される有力生絲商人若尾逸平の伝記⁹⁾によりますと、逸平・幾造兄弟は、甲府から八王子を通過して横浜に向かったとありますので、多分、この「浜街道」を往復していたのでしょう。

しかし、最近の研究では、横浜に向けての輸出生糸の最大の供給地は、幕末期には、甲州や信州でなく、上州や奥州であり、そこからの生絲はむしろ利根川と江戸川の水運を利用して運ばれたのではないかと指摘されています。東京大学文学部におられた高村直助氏の論文「水上のシルクロード」¹⁰⁾によれば、表 3 に示したように、幕末の輸出生糸の 3 分の 2 を占めた奥州・上州の生絲は、利根川と江戸川を通過して横浜へ運ばれており、八王子を通る生糸も幕末には江戸問屋の荷物改めを受ける必要から、その多くは一旦江戸に運ばれ、そこから海路横浜に向かったようです。

そうだとすると、八王子からわが「シルクロード」を経由して生絲が大量に送られたのは、江戸の生絲問屋の改めが廃止される慶應 2 年（1866）5 月から明治に入ってからのことであり、輸送量は信州や甲州で器械製糸業が発達する明治 10 年代にかけてさらに増加したということでしょう。しかし、明治 22 年（1889）に八王子と新宿を結ぶ甲武鉄道が開通すると、生絲輸送も鉄道によって担われるようになりますから、八王子と横浜を結ぶ「シルクロード」の活動が盛んだったのは、主として明治 10 年代までの明治前期のことだったと見て間違いないでしょう。何れにせよ、多摩の人々が幕末開港とともに横浜に積極的に乗り出して、外国商人との直接の交流を行ったことは確かな事実であり、そうした多摩地域は攘夷思想の温床とは程遠い地域であったと思われます。むしろ外国の開明的思想を積極的に取り込むことによって自由民権運動の一大拠点へと進みつつあった地域だと見るべきでしょう。

なお、甲武鉄道を敷設する計画と並んで、八王子から川崎へ向かう武蔵鉄道の計画が横浜の生絲売込問屋原善三郎らと八王子の商人らによって出願されていましたが、東京中心の市場圏の構築を優先する政府は、甲武鉄道の方を認可しました。武蔵鉄道は繰り返しての出願の末、横浜鉄道として認可され、明治 41 年ようやく開通しますが、貨物輸送は少なく、大正 6 年に国有化されます（甲武鉄道は明治 39 年国有化）。「絹の道」に代えて「絹の鉄道」を敷設するという横浜商人の夢は実らなかったと言わねばなりません。

3. 外資に頼った萩原器械製糸場の発展と挫折

ところで、地方生絲商人としての活動の条件が厳しくなることを乗り越える方法がもうひとつありました。それは、生絲商が小生産者を賃挽きとして組織するのではなく、器械製糸場をみずから設立し経営する方法です。八王子市中野上町（もと南多摩郡小宮村西中野）にあった萩原彦七の器械製糸場はその典型例でした。政府が明治26年度に調査した『全国製糸工場調査表』によりますと、当時の萩原製糸所は340釜（＝繰糸女工340人）という、きわめて大規模な設備をもつ日本最大の器械製糸場でした。この設備は有名な富岡製糸場の324釜を僅かながら上回っていますし、信州にも甲州にも当時これほど大きい製糸場はひとつもありませんでした。340釜から生産された生絲は3万9700斤と報告されていますから、1斤＝160匁で換算しますと、706個ということになります。先の表2によれば、萩原彦七の前年度＝明治25年度の横浜問屋への出荷量は109個に過ぎませんが、それを遙かに上廻っています。もっとも、『大日本製糸家名誉録』に掲載された明治25年度の記録には、109個という出荷量と並んで、萩原製糸場の「1ヶ年出来高 2萬斤」とも記されており、1斤＝160匁としますと、356個となりますから、「出荷高」は、「出来高」＝製造量の3分の1弱にしかありません。萩原製糸場の生絲は品質が良かったですから、国内機業地に送られることはなく、全て輸出向けに横浜に送られたことは間違いないでしょう。とすると、これらのギャップは、どこから生じたのか。ここに萩原製糸のもつ独自の性格を解く手掛かりがあると私は考えています。それは、一言で言うと、萩原製糸の生絲の大部分は、横浜の生絲売込問屋の手を経ないで、直接に外国商館に持ち込まれたことを示しているのです。『大日本製糸家名誉録』の出荷データは横浜問屋への入荷記録によっていますから、問屋の手を経ない部分は記録されていません。明治10年（1877）に32釜の設備をもつ32人繰りの規模から出発した萩原製糸が、僅か15年の間に10倍以上の規模に拡張し、日本一の大規模製糸場になった背後には、私は、横浜の外国商館による強力な資金援助があったものと推定しています。

この外国商館による資金援助のことは、従来の歴史研究では、正面から評価されたことはほとんどありませんでした。昭和42年（1967）に刊行された分厚い『八王子市史』には、萩原製糸場と外国商館との直接取引のことは、全然触れられていません。その後昭和54年（1979）に出版された、村上直・沼謙吉『わが町の歴史・八王子』や、平成10年（1998）に出版された、樋口豊治『市民のための八王子の歴史』を見ますと、萩原製糸場が明治13年（1880）に100人繰りに拡大したときにフランス人シャモナールを招いて技術指導を受けたことは記していますが、外国商館から資金援助を受けたとは書いていません。唯一、昭和51年（1976）に朝日新聞東京本社社会部が編纂した前掲『多摩の百年』下巻〈絹の道〉だけが、萩原製糸場が明治「十二年ヨリ外商ノ信用ヲ受ケ為ニ横浜在留ノ『ロドビック』商会ト特約ヲ

です。横浜問屋を経由しないで外国商館と直接に取引する萩原製糸の場合は、多額の繭購入資金を自己資金で賄うことはおそらく不可能でしたから、問屋からでなく外国商館から資金を借りていたはずですが、資金借り入れ先の『ロドウィック』商會が潰れてしまったあと、萩原製糸としては、新たな借り入れ先を探さねばなりません。片倉組のように横浜問屋から借りる方法もあったと思われますが、彼らと対抗しつつ外国商館と直結してきた萩原製糸としては、そうしたことは問屋の軍門に下るようで避けたいと考えたのでしょう。新しい取引先として、明治19年から選んだのが新=甲九十番館と呼ばれる生絲輸出の最有力商社 Siber Brenwald & Co. でした。このことは、しばしば引用した『大日本製糸名家名譽録』だけでなく、前掲『三多摩郡人物評』の「萩原彦七君」の項に

「君明治十九年神奈川県下〔当時の多摩地方は神奈川県所属で、26年4月に東京府へ移管〕蚕糸業郡部製糸取締頭取となる。全年横浜居留地甲九十番館主アベナ氏と特約し、直輸出をなす。想ふに八王子地方にて横浜売込商の手を経ず海外に直輸出をなすは君一人なるべし」(11頁)

と明記されています。この書物の萩原彦七の項には、彦七の生い立ちや製糸場の拡大の様子などが良く書かれているので、いろいろな本の種本となっているようですが、「特約」の中身については書いてないので、果して資金融通があったかどうかにはどの本も触れていません。しかし、新=甲九十番館についてもまた、いくつかの製糸家ないしその結社に対して前貸金融を行っていた事実は明らかにされています。山梨県甲府の草薙社という器械製糸家の結社は、明治36年(1903)から43年(1910)にかけて甲九十番館と出荷生絲の一手販売契約を結び、同商館から資金融通を受けたことが当時の『山梨日日新聞』などにも指摘されており、同社社長の郷佐七家には、それに関する記録が残されていましたが、引用は省略します¹⁵⁾。そうした事例から見て、萩原製糸場が明治19年以降、日本最大規模の製糸工場としてますます巨大化した背景には、最大の生絲輸出商館である甲九十番館からの強力な資金提供があったことは、ほぼ間違いのないことと思います。

もっとも、私は萩原製糸場に対して外国商館が融資を行ったことを記した文書を証拠として提示したわけではありませんから、石井の主張は飽くまでも推定に止まるではないかというご批判が出ることと思います。それは、その通りです。今後、そうした仮説を実証できるかどうかという見方で研究が進められれば、新しい史料が発見される可能性があるでしょう。しかし、現在ある史料の中にも、そうした外資導入をある程度まで窺わせる記述があるように思います。先にも引用した『三多摩郡人物評』の「萩原彦七」にある奇妙な記述がそれです。「萩原彦七」の項目の冒頭で著者は、あるイギリスの歴史家が、ナポレオンの評価はイギリスでは『食人鬼』等々最悪なのに対して、フランスでは国家に『平和幸福』を与えたとし

て最高の評価を与えているが、毀誉褒貶がこうなるのはナポレオンがまさに未曾有の「豪傑」だからだと述べ、それに続いて、「君〔彦七〕が八王子地方に於て毀誉褒貶の間に彷徨しつつあるの一豪傑たることを疑はず。『大人は大敵を有す』これ君が一個の巨人たるを証するものなり」と、八王子での萩原彦七の社会的評価が真二つに割れていることを述べているのです。しかし、何故真二つに割れているのかについては著者は黙して語りません。誠に奇妙な人物評だと言えましょう。それに続いて、彦七の生い立ちが記されており、その部分がしばしば引用されるので、ご存知の方も多いと思いますが、彦七は嘉永3年（1850）に相模国愛甲郡依知村の農家の3男に生まれ、12歳のときに厚木町の古着商の雇人となり、18歳のとき高座郡当麻村の糸繭商に雇われて、明治5年23歳のときに八王子の糸繭商萩原家の養子になって活躍します。そして神奈川県令野村靖が明治9年に八王子で40数人の糸繭商を集めて、器械製糸場を作れと勧めたのに唯一人応じて、翌明治10年に32人繰りの器械製糸場を設立します。長野県諏訪の豪農で、のちに世界最大規模の製糸家となる片倉兼太郎が32人繰りの製糸場を設立したのが明治11年ですから、2人はほとんど同時に同規模でスタートを切ったことになりましょう。『人物評』では、萩原について「当時君祖先の遺産あるにあらず又た他人の補助あるにあらず」と述べており、資金不足のままスタートしたことが窺えましょう。それが、明治13年6月の天皇の巡幸にさいして、政府高官が同製糸場を訪れて賞状を下付したときの記録には、「工女百人ヲ使役シ日々三貫目ノ糸ヲ製スベシ。建設費一万円。営業費半年ニ一万六千円ヲ要スト云フ」¹⁰とありますので、この時には、既に外国商館から資金援助を受け始めていたと思われます。「萩原彦七」の項目の執筆者は、最後に、彦七は『八王子町民は悉く死せり』と述べていると指摘し、「無資本にて此の単独なる大事業を遂成したる君が眼中より我が八王子町民を觀察し来らんには実に我が八王子町民は死し居れる如くならん」と、彦七の言に賛意を表しているのですが、一体何のことだか、今となっては良く分からないかも知れません。私は、ここに当時の日本社会における人々の外資導入に対する批判的・警戒的ムードと、そうした消極的姿勢に対する萩原彦七の反撥とが示されているのだと理解します。

4. 外資排除路線を突き破った多摩製糸業一結びに代えて

『三多摩郡人物評』が刊行された明治26年（1893）は、あの日清戦争が始まる年の前年に当たります。当時、日本の国会で議員達が政府を批判していた問題は、それまでのような国内の民力休養＝減税問題とは異なり、条約改正を中心とした外交問題でした。条約改正交渉が進む中で、改正が実現したときには、外国人が日本の裁判を受けるようになることと引換に、居留地が撤廃されて内地に入りこむようになり、内地で日本人と雑居して経済活動を営むことが出来るようになりますが、内地雑居は不味いから禁止して欲しいという議論が沸騰

したのです。その背後には、禁止されているはずの外資の国内侵入が密にかなり進んでおり、その威力は大変なものなので、もしも外資導入が全面解禁されると日本経済は外国人に完全に乗っ取られるかも知れないし、中国からは資本でなく安い労働力が流入して労働市場を混乱させるかも知れないという予測がありました。そうした議論が伊藤内閣の軟弱外交を批判しつつ、日清戦争への道を掃き清めたのですが、それはひとまず置くとして¹⁷⁾、萩原彦七が外資を導入していたことは、かかる雰囲気の下では、大っぴらにすることが憚れる事柄だったのであり、萩原のそうした行動についての八王子の人々の評価は真つ二つに割れていたのです。『人物評』が歯に物が挟まったような奇妙な批評をしているのは、恐らくそのような社会的・政治的雰囲気の出産でしょう。

明治32年(1899)には、いよいよ日本政府と国民の悲願であった条約改正が実現して、居留地が廃止され、外資導入が自由化されます。しかし、ロシアとの戦争の危険が迫るかに見える日本のカントリーリスクが高いこともあって、外資は、警戒論者が心配したほどには入ってきませんでした。そうした中で萩原製糸場は、経営不振に陥り、明治34年(1901)12月には片倉組によって買収されてしまいます。このとき萩原製糸場は588釜にまで拡大していますが、当時は700釜台の製糸場が現われていますから、萩原はトップではなくなっています。片倉組は3製糸場合計で1331釜というスケールです。もちろん、片倉組に買収される時には、外資との関係は切れています。萩原製糸場の破綻の原因は不明ですが、製糸場だけでなく織物工場や養蚕伝習所を作ったり、公共のための萩原橋の建設に資金を投入したことが裏目に出て、本業である製糸場経営が不振に陥ったときの資金ショートをもたらした可能性があります。最大の資金提供者であった頼みの外国商館は、萩原製糸場が不振に陥っただけでなく、自分のコントロールが効かなくなったと見るや、さっさと資金を引き上げたとも考えられます。しかし、この点も、正確なことは今後の実証研究の進展を待つ必要があるでしょう。

何れにせよ、政府の外資排除路線を突き破った萩原製糸場の活動は、ひとつのエピソードに終わったと言わねばなりません。日本の産業革命は、基本的には、外資を排除したままの自力建設という国際的には異例の形で進展したのであり、その結果、少数の大資本家と無数の零細資本家・生産者からなり、ブルジョア・デモクラシーの担い手たるべき中小資本家層が弱いというアンバランスな構成を打ち出すことになりました。製糸業について言えば、外国商館からの資金導入は、ごく一部のケースに止まり、製糸金融の主流は横浜売込問屋からの前貸金融を軸とするものとなったのです。日本経済に対する外国資本の直接投資が増え始めたのは、20世紀末以降の、つい最近の十数年の出来事に過ぎません。

以上述べてきましたように、多摩の地域は、幕末から横浜との繋がりが強かったために、外国人との交流が盛んであって、攘夷精神とはもともと関係が浅かったのであり、むしろ欧米諸国との関係を積極的に深める開明的な精神が他の地域よりも強かったと言えましょう。

そのことが、新選組の攘夷運動の転換や器械製糸場への外資導入にも大きな関係があったのではないかと、というのが私の取り敢えずの結論であり、自由民権運動の展開もそうした状況と繋がりがあると思います。従来の研究、とくに思想史研究は、かつて横行した経済と直結する把握方法（丸山真男氏の言葉を借りれば「基底体制還元主義」）への反動から、逆に経済状況をまったく無視した観念的な把握に陥ってしまっているのではないかと、というのが、私の批判であります。

21 世紀に入った最近の日本は、外国との経済的・政治的繋がりが強まりながらも、精神的には依然として鎖国状態だと言われることが多いようですが、そうした今日の日本にとって、幕末維新期の多摩の事例は、日本にもさまざまな可能性がありえたとし、今後もありうることを示唆しているように思います。東京経済大学は、まさにその多摩に位置する大学として、アジアや欧米との相互交流に積極的に向かっていく研究教育活動を今後ますます展開すべきでしょう。長時間にわたるご清聴ありがとうございました。

注

- 1) 松浦玲『新選組』（岩波新書、2003 年）6 頁。
- 2) 島崎藤村『夜明け前』（新潮社、1936 年、新潮文庫、1955 年）第 1 部（上）158～9 頁。
- 3) 佐藤文明『未完の多摩共和国－新選組と民権の郷－』（凱風社、2005 年）347 頁。
- 4) 宮地正人『歴史のなかの新選組』（岩波書店、2004 年）、鶴巻孝雄「新選組情報を読む」（町田市立自由民権資料館編『豪農たちの見た新選組－多摩に芽生えた政治意識－』町田市教育委員会、民権ボックス 18 号、2005 年）。
- 5) 朝日新聞東京本社社会部『多摩の百年下－絹の道』（朝日新聞社、1976 年）50 頁。
- 6) 佐々木潤之介『幕末社会論』（塙書房、1969 年）。
- 7) 前掲『多摩の百年下－絹の道』67 頁。
- 8) 深井斧三郎『三多摩郡人物評』（1893 年）23 頁。
- 9) 内藤文治良『若尾逸平』（1914 年）353～4 頁。
- 10) 高村直助「水上のシルクロード」（吉田伸之・高村直助編『商人と流通』山川出版社、1992 年）。
- 11) 有泉貞夫『やまなし明治の墓標』（甲斐新書、1979 年）。
- 12) 海野福寿『明治の貿易』（塙書房、1967 年）。
- 13) 石井寛治「山梨県の製糸金融」（山口和雄編著『日本産業金融史研究 製糸金融篇』東京大学出版会、1966 年）388～9 頁。
- 14) 藤本実也『開港と生絲貿易』（中巻）325 頁。
- 15) 前掲『日本産業金融史研究 製糸金融篇』466 頁。
- 16) 前掲『多摩の百年下－絹の道』65 頁。
- 17) 詳しくは、石井寛治『日本の産業革命－日清・日露戦争から考える』（朝日新聞社、1997 年）。

—— 2007 年 11 月 19 日受領 ——